

---

# 土地分類基本調査

---

## 「三日町」

5万分の1

国 土 調 査

岐 阜 県

2 0 0 3

# 序 文

この調査は、国土調査法に基づき国土の開発及び保全並びにその利用の高度化に資するために、国土の実態を科学的かつ総合的に調査したものです。

本県は、昭和57年度からこの調査を実施し、40の調査対象図幅のうち既に31図幅について印刷を完了しています。本書は、平成12年度から平成14年度にかけて調査した5万分の1地形図「三日町」について、「三日町」図幅として取りまとめたものです。

この調査の実施にあたって協力いただいた関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、この成果が今後、県土の秩序ある発展を図るための企画・立案の基礎資料として広く活用されることを希望します。

平成16年3月

岐阜県地域計画局長 橋場 克司

# ま え が き

1. 本調査は、岐阜県が国土交通省土地・水資源局国土調査課の指導を得て、実施したものです。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿です。
3. 本調査の実施及び成果の作成機関並びに担当者は、下記のとおりです。

## 記

総 括	岐阜県地域計画局土地対策室		
地形分類調査	岐阜大学教育学部	名 誉 教 授	関 根 清
表層地質調査	〃	教 授	小井土由光
土地利用 現況調査	岐阜大学農学部	助 教 授	木村 正信
土 壤 調 査	岐阜県農業技術研究所	環 境 部 長	小 林 忠 彦
	岐阜県森林科学研究所	主 任 研 究 員	渡 邊 仁 志
	〃	専 門 研 究 員	茂 木 靖 和

# 目 次

## 総 論

I	位置及び行政区画	1
II	人 口	2
III	産 業	4

## 各 論

I	地 形 分 類	9
II	表 層 地 質	15
III	土 壤	19
IV	土地利用現況	31

# 位置図



		下梨	白木峰	10年度調査 有峰湖	10年度調査 槍ヶ岳
		白川村	飛騨古川	9年度調査 船津	9年度調査 上高地
	越前勝山	白山	12年度調査 三日町	8年度調査 高山	8年度調査 乗鞍岳
	荒島岳	白鳥	11年度調査 萩原	8年度調査 御岳山	8年度調査 木曾福島
7年度調査 冠山	7年度調査 能郷白山	5年度調査 八幡	6年度調査 下呂	元年度調査 加子母	元年度調査 上松
4年度調査 横山	3年度調査 谷汲	2年度調査 美濃	63年度調査 金山	62年度調査 付知	62年度調査 妻籠
42年度調査 長浜 (経企庁)	57年度調査 大垣	58年度調査 岐阜	48年度調査 美濃加茂 (経企庁)	61年度調査 恵那	61年度調査 中津川
59年度調査 彦根東部	59年度調査 津島	名古屋北部	58年度調査 瀬戸	60年度調査 明智	60年度調査 根羽
	59年度調査 桑名				

総

論

# I 位置及び行政区画

## 1. 位置

この調査の対象地域は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「三日町」図幅である。

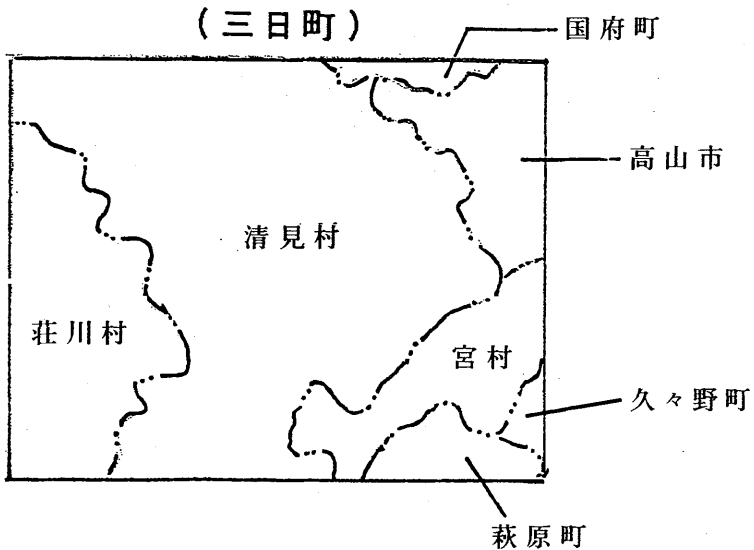
経緯度は、東経  $137^{\circ} 00' \sim 137^{\circ} 15'$ 、北緯  $36^{\circ} 00' \sim 36^{\circ} 10'$  の範囲である。

## 2. 行政区画

本図幅の行政区画は、高山市、萩原町、清見村、荘川村、宮村、久々野町、国府町の7市町村であり、それぞれの行政区域の一部からなっている。

(図一1 参照)

図一1 行政区画図



## Ⅱ 人 口

調査区域にかかる7市町村の人口は97,040人（平成12年国勢調査結果）で、県人口の4.6%を占めている。

これらの全市町村では、昭和60年から平成12年までに1,364人増加している。

県全体で3.9%増加しているのに対し、この地域全体では1.4%の若干の増加傾向となっている。

表—1 人口

区 分 行政区域	昭 和 60 年		平 成 2 年		平 成 7 年	
	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)
高 山 市	65,033	20,018	65,243	21,020	66,139	22,441
萩 原 町	11,578	2,955	11,522	3,113	11,679	3,279
清 見 村	2,576	665	2,541	665	2,568	679
莊 川 村	1,562	485	1,450	435	1,390	451
宮 村	2,402	595	2,414	617	2,633	687
久々野町	4,506	1,012	4,283	1,031	4,178	1,018
国 府 町	8,019	1,811	7,937	1,842	8,031	1,919
計	95,676	27,541	95,390	28,723	96,618	30,474
県 計	2,028,536	566,089	2,066,569	601,015	2,100,315	643,531



高山市・宮村では、昭和60年から平成12年までに増加傾向にあるものの、萩原町・清見村・宮村・国府町では昭和60年から平成2年の間で減少傾向にあったが昭和60年から平成12年としては増加している。しかし荘川村では13.9%、久々野町では8.3%と著しく減少している。

(表-1)

平成12年		人口増減(人)			人口増減率(%)		
人口(人)	世帯数(戸)	60~2年	2~7年	7~12年	60~2年	2~7年	7~12年
66,430	22,976	210	896	291	0.3	1.4	0.4
11,716	3,411	△ 56	157	37	△ 0.5	1.4	0.3
2,657	692	△ 35	27	89	△ 1.4	1.1	3.5
1,345	430	△ 112	△ 60	45	△ 7.2	△ 4.1	△ 3.2
2,659	731	12	219	26	0.5	9.1	1.0
4,132	1,020	△ 223	△ 105	△ 46	△ 4.9	△ 2.5	△ 1.1
8,101	2,018	△ 82	94	70	△ 1.0	1.2	0.9
97,040	31,278	△ 286	1,228	422	△ 0.3	1.3	0.4
2,107,700	678,036	38,033	33,746	7,385	1.9	1.6	0.4

資料 国勢調査結果による。

### Ⅲ 産 業

#### 1 農林業

地域内の市町村の総農家数は4,187戸で、これは県下総農家数の4.9%にあたり、専業農家の割合は県平均の5.8%と同程度の7.8%となっている。また、経営耕地面積は3,818haで、県下総経営耕地面積の6.4%を占め、農業粗生産額は県下全体の11.0%となっている。

この地域は畜産業が盛んであり、農業粗生産額の生産種別構成を県下全体と比較すると、米がやや低く畜産が高くなっている。肉用牛の繁殖、肥育及びハム等の加工業も盛んで、ブランド化により高い収益をあげている。

(表-2)

表-2 農業の概要

区分 行政区域	農 家 数				経営耕 地面積 (ha)	農業粗生産額 (百万円)				
	総 数 (戸)	専業 (戸)	兼 業 (戸)	専業率 (%)		総 額	米	野菜	畜産	その他
高山市	1,358	183	1,175	13.5	1,490	7,375	856	3,867	2,182	470
萩原町	779	40	739	5.1	397	822	231	243	231	117
清見村	376	31	345	8.2	484	1,562	170	527	796	69
莊川村	140	6	134	4.3	163	203	36	120	41	6
宮 村	215	4	211	1.9	172	343	114	142	79	8
久々野町	453	20	433	4.4	364	1,503	159	611	146	587
国府町	866	41	825	4.7	748	1,851	446	564	302	539
計	4,187	325	3,862	7.8	3,818	13,659	2,012	6,074	3,777	1,796
県 計	84,764	4,919	79,845	5.8	59,700	123,876	32,756	31,791	39,925	19,404

資料 岐阜県農林水産統計年報 (平成13~14年) による。(農家数は、「2000年世界農業センサス」結果により、兼業農家には、自給的農家を含んでいる。)

林業については、地域内の市町村の林野面積が109,432haで、県下総林野面積の12.6%を占めている。

また、民有林の比率は67.8%で、県平均の 79.1%と同程度となっている。民有林のうち人工林の比率は42.4%と、県平均の44.9%と同程度となっている。

(表-3)

表-3 林業の概要

行政区 区域	林 野 面 積 (ha)				林 家 数 (戸)
	総 数	国 有 林	公 有 林	私 有 林	
高 山 市	9,959	3	453	9,504	1,356
萩 原 町	12,664	2,466	1,171	9,027	917
清 見 村	34,297	13,417	1,205	19,675	356
莊 川 村	30,780	15,826	1,191	13,763	234
宮 村	4,732	1,553	1,684	1,496	157
久々野町	9,518	1,489	988	7,041	433
国 府 町	7,482	485	106	6,891	696
計	109,432	35,239	6,798	67,397	4,149
県 計	866,205	181,437	75,812	608,956	36,104

資料 平成13年度岐阜県森林・林業統計書による。(林家数は、「2000世界農林業センサス・林業事業者調査」の結果による。)

## 2 工 業

この地域の事業所数は、県全体の3.8%にあたる739事業所、従業員数は7,216人で、県全体の3.1%となっている。また年間製造品出荷額は1,066億円で、県全体の2.1%となっている。

この地域の1事業所あたりの平均従業員数は9.8人で、県平均の11.9人と同程度であるが、比較的規模の小さい事業所が多い。また、従業員1人あたりの年間製造品出荷額等も1,477万円で、県平均の2,194万円を3割程度下回っている。

(表—4)

表—4 工業の概要

行政区 区域	事業所数				従業員数(人)			年間製造品 出荷額等 (百万円)
	総数	会社	組合 その他 の法人	個人	総数	常 勤 用 者	個人事業 主及び家 族従業員	
高山市	454	193	5	256	4,621	3,402	362	73,193
萩原町	96	51	1	44	1,055	739	60	14,385
清見村	37	15	3	19	424	326	27	5,422
荘川村	7	3	1	3	31	22	4	420
宮村	25	11	1	13	113	71	16	870
久々野町	36	16	2	18	246	183	26	3,225
国府町	84	37	0	47	726	515	71	9,099
計	739	326	13	400	7,216	5,258	566	106,614
県計	19,269	8,279	149	10,841	230,104	165,942	16,775	5,048,080

資料 平成13年工業統計調査結果による。

### 3 商 業

商店数は 2,151店舗で、県下総商店数の6.4%、年間販売額は3,397億円で、県全体の5.5%となっている。商店のうち卸売業の占める割合は17.2%で、県平均の22.9%を下回っている。

従業員 1人あたりの年間販売額は3,086万円で、県平均の3,327万円と同程度となっているが、清見村・荘川村・宮村・久々野町・国府町では、7割以下となっている。

(表—5)

表—5 商業の概要

行政 区域	商 店 数			従 業 者 数 (人)	年 間 販 売 額 (百万円)
	総 数	卸 売 業	小 売 業		
高 山 市	1,733	327	1,406	9,074	297,494
萩 原 町	194	26	168	956	24,317
清 見 村	26	1	25	98	2,049
荘 川 村	20	1	19	70	1,197
宮 村	19	2	17	75	1,550
久 々 野 町	68	5	63	238	3,527
国 府 町	91	8	83	498	9,606
計	2,151	370	1,781	11,009	339,740
県 計	33,610	7,683	25,927	184,690	6,143,871

資料 平成9年商業統計調査結果による。(代理商・仲立業を除く。)

各

論

# I 地 形 分 類

## 1 地形概説

日本列島はユーラシア大陸の縁辺部に位置し、プレート論的観点からは太平洋プレート・フィリピンプレートとアジアプレートの会合部に位置する弧状列島からなりたっている。このようなプレートとプレートとの会合部における、特有の地殻運動を反映して、東北地方から中部地方を経て近畿地方北部に至る地域では、応力場的にはほぼ東西の最大圧縮応力場を形成し、これを反映して、南北方向に軸をもつ曲隆と曲降運動による、大地形が規則的に配列・分布している。この大地形を骨格として、中・小地形がこれに付随する形で、分布するという特徴をしめしている。それ故、個々の山地の山稜線や河谷などの地形にも、その配列や分布に規則性が認められる。これらの曲隆・曲降運動の波長は、約70～100kmのひろがりをもっているという。

中部地方のような東西圧縮応力場の環境下では、曲隆・曲降運動の進展に伴って、その傾斜の変換点区域には帯状に応力が集中し、歪みの蓄積のために逆断層が多発し、曲隆部の地塊を一層隆起させ、断層山地が形成される。それ故に、曲隆部と曲降部との境には南北方向の逆断層が認められる場合が多い。当然のことながら、これらの逆断層と共役関係にある副断層が、これにはほぼ直交・斜交状に発生している場合も多い。

また、このような応力場に急激な圧縮応力が加わる環境下では、応力軸に斜交する剪断応力性の断層と考えられる横ずれ断層が多発するようになる。このために、中部地方においては、北東～南西、北西～南東方向のA級活動度の横ずれ逆断層も卓越している。

以上のような地殻運動の特徴を反映させて、中部地方における断層運動は、大局的には南北方向、東西方向、北東～南西方向、北西～南東方向への断層系として捉えることができる。上述した曲隆・曲降性の大地形は、これらの断層運動の運動形態を反映させて、山脈状・山塊状の山地や舟窪状・盆地状の低地に細分されている。

日本アルプスの東縁に位置する糸魚川・静岡線以西の、中部地方から中国

地方にかけての地域は、藤田（1980）が指摘しているように、東高西低の曲隆と曲降運動を繰り返した傾動地塊からなるといわれている。本図幅地域は、この内の富山平野から伊勢湾に至る曲降性の山地内に位置している。この曲降性の山地は、全体的には北高南低の定高性の壮年期山地を形成しながら、飛驒山地（飛驒高原）・美濃山地（美濃高原）・三河山地（三河高原）を経て、伊勢湾に至るといふ地形環境下にある。飛驒山地は、位山分水嶺山地（本図幅を二分するその南側）より北側に位置する山地が北飛驒山地と呼ばれ、位山分水嶺山地より南側の南飛驒に位置する山地が阿寺山地に細分され、その南が美濃山地、そして屏風山断層崖を境に三河山地へと連続している。

飛驒山地は、標高1000m～1500mに定高性の頂稜部が広く分布する中山性山地からなり、古くから標高1000m、1300m、1500m付近に、3段からなる侵蝕平坦面が存在するといわれてきた。これらの侵蝕面を連ねた地形面が、前輪廻の隆起準平原面である。これを反映させて、飛驒山地の頂稜部は、東と西の両側に位置する飛驒山脈・両白山地に比べて、穏やかな早壮年期の地形景観を呈している。

南飛驒から東濃・中濃地域にかけての美濃山地は、標高1000m内外の定高性の山地からなっている。美濃山地の東部は、阿寺断層崖によって、阿寺山地に細区分されている。本図幅に隣接する御嶽山(3068m)は、阿寺山地の北端部に位置し、阿寺山地を基盤として形成された第四紀の火山であるが、火山本体の高さは約1000mであるといわれている。

本図幅の山稜線や河谷は、上述したように、中部地方の地殻運動や断層運動の特徴を反映して、全体的には北～南、東～西、北西～南東と、北東～南西方向に配列・連続するという特徴を有しているが、中部地方の断層運動には、北西～南東、北東～南西方向の横ズレ変位の断層が卓越していて、北西～南東方向の断層の一つが、本図幅の地形にも影響を与えていると考えられる左横ズレ逆断層の阿寺断層に代表される断層系である。これらの横ズレ逆断層は、地震災害的には、危険度がA級の活断層である。従って、本図幅内には、活断層起因の断層地形やこれに類似する断層地形及び、活断層を推定させる地形的リニアメントが卓越している。

本図幅には神通川水系のうちの宮川水系と木曾川水系に流入する飛驒川水



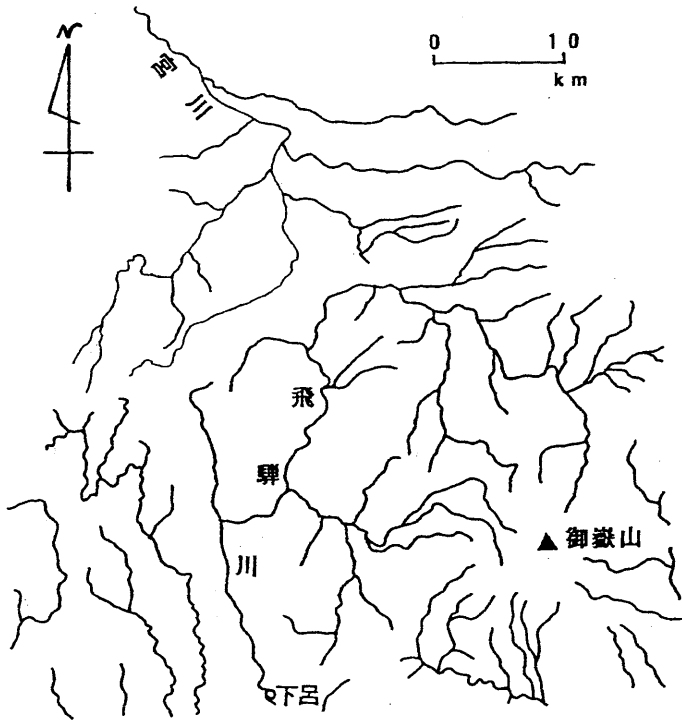


図1 宮川水系と飛驒水系の上流部の概略図

系の河川の一部が位置しているが、このような活断層運動や地殻運動を反映して、宮川水系の河川と飛驒川水系の河川との間にはその水系網に著しい特異性が認められる。即ち、宮川源流域の水系網は位山分水嶺に並行するような形に各支流の源流が位置しているのに対して、飛驒川源流部から上流部（本図幅外ではあるが）の水系は、御嶽山を反時計回りに取り囲むように、約270度曲流するような水系網を展開し、萩原から下呂付近までは阿寺断層に沿って南東流し、下呂温泉の下流で、再び南西流にその流路を方向転換させて、「中山七里」の先行性河川の狭窄部を流下するような水系網を示している。1/20万地勢図から、宮川と飛驒川の両上流部における水系網の一部を抽出したのが、図1である。これからも明らかなように、源流部において北流している飛驒川は、位山分水嶺に接して、その流向を南西、南東方向な

どに変え、下呂方向に流出するという特異的な水系網を形成している。このように両河川の水系網をみる限りにおいても、飛騨川がかっては北流し、現在の宮川水系に流入していたことを推定させる。このことは古飛騨川の堆積物とされている大円礫からなる「松原礫層」が、位山分水嶺を越えて宮川流域内に堆積している地質的事実からも推定することができる。

ここで扱う台地は、河谷沿いに発達している第四紀、更新世中・後期の河岸段丘の地形からなる砂礫台地である。本図幅には、神通川水系の支流宮川河谷と、飛騨川水系のうちの位山・船山に源流する支流の河岸段丘の北西端部からなる台地が位置している。飛騨川水系の河岸段丘は、3段以上の段丘地形から成り立っているが、ここでは段丘地形を段丘面の河床からの高度・比高や段丘礫層の風化度などによって、便宜的に区分した。本図幅には下位段丘のみが分布している。

## 2 山地

日本アルプスから中国地方東部にかけての地域は、大局的には曲隆・曲降運動が交互に連続する地盤運動からなる地域であり、当然のことながら、山地地形もこれらの地盤運動や地質構造を反映している。

本図幅の地域は、大局的には富山湾～伊勢湾に至る曲降地形中に位置するが、中部地方は「日本の屋根」といわれるように、曲降地形の地域といえども富山湾に面する北部地域で約2000m、伊勢湾に面する南部で約1200～1300mの高度を有する定高性の山地からなり、北部山地が飛騨山地(飛騨高原)、中央部の山地が美濃山地(美濃高原)、そして南部山地が三河山地(三河高原)として三山地に区分されている。

飛騨山地を構成する岩石は、片麻岩、石英斑岩を主とし、古生界・中生界の堆積岩も分布しているが、特に、この地域の片麻岩は飛騨変成岩類に属するもので、日本列島の基本的構造をなす飛騨帯を形成している。

飛騨山地は、位山分水嶺山地を挟んで、北側が北飛騨山地、南側が阿寺山地に細分されている。中部地方の断層運動の特徴を反映して、これらの山地は地塊化が進行し、山稜線の方法や山地内の河谷の流向は、全体的には北西～南東、北東～南西及び南～北方向が卓越する分布特徴を有する。このため

に、本図幅の山地を、便宜的にこれらの特徴によって、小山塊に細分することとした。本図幅には、飛驒山地のうちの北飛驒山地(ここでは単に飛驒山地とする)と、位山分水嶺山地とが含まれているので、ここでは本図幅の山地を、飛驒山地 (I a)、位山分水嶺山地 (I b) とした。

### (1) 飛驒山地 (I a)

飛驒山地は、上述したように、飛驒山脈の西方に位置し、岐阜県の北部に広がる山地であり、飛驒高原や飛驒高地とも呼ばれている。定高性の頂稜部が広く分布する中山性山地からなり、古くから標高1000m、1300m、1500m付近に、3段の侵蝕平坦面をもつ前輪廻の隆起準平原面であるといわれてきた。これを反映させて、飛驒山地の頂稜部は両側の曲隆性山地、飛驒山脈や両白山地に比べて、穏やかな早壮年期の地形景観を呈している。

本図幅には飛驒山地の南西端部が位置している。

### (2) 位山分水嶺山地 (I b)

位山分水嶺山地は、鷲ヶ岳(1672m)・烏帽子岳(1625m)・川上岳(1626m)・位山(1529m)などからなる山地である。行政的には北飛驒と南飛驒との境界を形成しているものの、地形的・気候的には飛驒と美濃との分水嶺を形成している山地である。地形的には日本海側と太平洋側との地形界を、気候的には日本海型気候と太平洋型気候との気候界を形成している。

上述したように、宮川水系と飛驒川水系との間の水系網の異常性の原因は、位山分水嶺の断層起因の隆起にあったが、その断層運動は、位山分水嶺の北側の高山盆地と境する江名子断層に始まり、続いて南側の宮峠断層へと波及し、地壘山地としての現在の位山分水嶺を形成させた。

## 3 台地

ここで扱う台地は、宮川水系、飛驒川水系の河谷内に発達している第四紀の更新世中・後期の河岸段丘の地形からなる台地であり、形成時期の異なる3段以上の河岸段丘からなる砂礫台地である。これらの段丘群を、段丘礫層の風化度や段丘面高度とその連続性などから、便宜的に「上位段丘(Uh段

丘)、「中位段丘(Um段丘)」と「下位段丘(Ul段丘)」に区分してきたが、本図幅には、そのうちの「下位段丘(Ul段丘)」が分布している。

ここでは、これらの台地を便宜的に、飛騨川上流部河岸段丘台地(Ⅱa)、宮川上流部河岸段丘台地(Ⅱb)と、小鳥川河岸段丘台地(Ⅱc)に区分した。

#### (1) 飛騨川上流部河岸段丘台地(Ⅱa)

この台地は、飛騨川源流部と上流部の河谷沿いに分布する河岸段丘で、「上位段丘(Uh段丘)」と、「下位段丘(Ul段丘)」からなる砂礫台地である。本図幅には、このうちの飛騨川上流部の位山と船山を源流とする支谷内に発達する、「下位段丘(Ul段丘)」からなる砂礫台地が分布している。

#### (2) 宮川上流部河岸段丘台地(Ⅱb)

この台地は、高山盆地とこれより上流部及び下流部の宮川の本流河谷沿いと、その支流の河谷沿いに分布する河岸段丘からなる砂礫台地である。本図幅には、高山盆地の上流部の支谷に発達する「下位段丘(Ul段丘)」からなる砂礫台地が含まれている。

#### (3) 小鳥川河岸段丘台地(Ⅱc)

この台地は、宮川中流域の支谷である小鳥川の河谷沿いに分布する河岸段丘で、「下位段丘(Ul段丘)」からなる砂礫台地である。下小鳥ダム(本図幅外)によって、段丘地形の連続性は中断する。本図幅には、このうちの小鳥川上流部の河谷内の「下位段丘(Ul段丘)」からなる砂礫台地が分布している。

### 1 参考文献

藤田和夫(1983)：日本の山地形成論、蒼樹書房、466p.

## Ⅱ 表層地質

### 1 表層地質概説

本図幅内では、火山性岩石の「濃飛流紋岩」およびそれを貫く深成岩の「花崗斑岩」がほぼ全域を占めて分布する。濃飛流紋岩は中生代の末期に激しい火山活動によって形成された巨大な火山岩体であり、おもに流紋岩質～流紋デイサイト質の堅固な溶結凝灰岩からなり、非溶結の火山性岩石や溶岩をはさむ。このほかの地質要素はきわめて限られた分布を示し、変成岩の「森部層」と深成岩の「船津花崗岩類」が濃飛流紋岩より古い時代の地質要素となる。濃飛流紋岩より新しい地質要素としては、深成岩の「白川花崗岩類」が濃飛流紋岩を貫いて、火山性岩石の「烏帽子岳火山岩類」が濃飛流紋岩を覆って、いずれも南西端に分布する。北東端の高山盆地西端域には半固結堆積物の「松原礫層」や火山性岩石の「丹生川火砕流堆積物」がそれぞれ分布し、これらすべてを覆って未固結堆積物が分布する。

### 2 地表地質細説

#### (1) 未固結堆積物

##### a) 礫がち堆積物 (g1)

宮川の最上流部やその支流にあたる川上川などに沿って、あるいは北西部の小鳥川に沿って分布する沖積層である。ほとんどが耕作地や宅地に改変されており、段丘堆積物や崩積堆積物とともに山間部における重要な生活の場を提供している。

##### b) 礫がち堆積物 (g2)

比較的規模の大きい河川においてはおもに段丘堆積物、それらの支流・支谷においてはおもに崩積堆積物である。前者では亜円礫～円礫から、後者では亜角礫～亜円礫からそれぞれなり、場所によっては両者の区別が明瞭につかない場合もある。

## (2) 半固結堆積物

### a) 礫質堆積物 (gc)

北東部の高山盆地西縁部に限って分布し、おもに淘汰の悪い角礫～亜角礫層からなり、全体に風化がすすみ、いわゆる「クサリ礫」と称する礫が多く含まれる。

## (3) 固結堆積物

### a) 砂岩 (ss)

図幅の南西端部に分布し、「手取層群」に属する堆積岩類である。おもに細粒～中粒の砂岩からなり、泥岩や礫岩をとまなう。後述する花崗岩質岩石に貫かれ、熱変成作用を受けて堅固になっている部分がある。

## (4) 火山性岩石

### a) 安山岩質岩石 (A)

図幅の南西端部に分布する烏帽子岳火山岩類とその東方に分布する竜ヶ峰火山岩類からなる。

烏帽子岳火山岩類は南隣の「萩原」図幅地域に広く分布し、第四紀の火山体としてはやや古く、鮮新世から更新世へかけて活動した火山の堆積物からなる。安山岩質の凝灰角礫岩あるいは火山角礫岩と溶岩が累積しており、後者が比較的少ないことを特徴としている。全体として堅固である。

竜ヶ峰火山岩類は、烏帽子岳火山岩類とは独立して小規模に分布するが、溶岩が烏帽子岳火山岩類のものに似ていることなどから、烏帽子岳火山岩類の一部と考えられている。

### b) デイサイト質岩石 (D)

高山盆地の周辺地域に広域にわたり点在して分布し、鮮新世末期の丹生川火砕流堆積物にあたり、おもに両輝石デイサイト質溶結凝灰岩からなり、一部に非溶結部をとまなう。非溶結部ではやや固結度が弱いですが、全体として堅固な岩石からなる。

c) 玄武岩質岩石 (BA)

図幅東端部の宮川流域に小規模に点在して分布する。カンラン石玄武岩あるいは普通輝石カンラン石玄武岩の溶岩あるいは岩脈からなり、鮮新-更新世に噴出したものと考えられている。

d) 流紋岩質岩石(溶結) (Ry1)

濃飛流紋岩の主体をなす岩相であり、図幅内のほぼ全域にわたり分布する。石英、斜長石、カリ長石の結晶片を多量に含み、少量の苦鉄質鉱物をともなう流紋岩質～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩からなる。岩相や岩質の相違から3～4枚の溶結凝灰岩層に区分され、全体に堅硬である。

e) 流紋岩質岩石(非溶結) (Ry2)

濃飛流紋岩のうち溶結凝灰岩をのぞく火山性碎屑岩に相当し、図幅の中央部にやや広く分布するほかは、溶結凝灰岩に挟まれて帯状に分布する。おもに流紋岩質で非溶結の凝灰岩～火山礫凝灰岩からなり、美濃帯の構成岩石や濃飛流紋岩由来の類質岩片を多量に含み、きわめて岩相変化に富む。溶結凝灰岩にくらべてやや固結度が低い、全体としては堅硬な岩石からなる。

f) 流紋岩質岩石(溶岩) (Ry3)

図幅の西部に小規模に分布する。斑晶に乏しい緻密硬固な流紋岩質溶岩からなり、流理構造をともなう。濃飛流紋岩の溶結凝灰岩を貫いて分布する。

(5) 深成岩

a) 花崗岩質岩石 (Gr)

図幅の南西端部に分布し、麦島花崗岩と呼ばれる岩体からなる。

麦島花崗岩は、おもに淡灰色～淡緑灰色の片状を示すトータル岩～花崗閃緑岩からなり、閃緑岩、石英閃緑岩、花崗岩をともなう。一時は飛驒片麻岩類の一員と考えられたこともあったが、現在ではそれらよりも若い船津花崗岩類の一員と考えられている。

## b) 花崗斑岩 (Gp)

濃飛流紋岩に密接にともなわれる貫入岩類である花崗斑岩と花崗閃緑斑岩、および落部川文象斑岩と呼ばれる岩体にわけられ、いずれも堅硬な岩石として産する。

花崗斑岩は、濃飛流紋岩の分布域に小規模な岩体として点在しており、カリ長石の斑状結晶をともない、微晶質の基質をもつ。

花崗閃緑斑岩は、図幅中央部に南北方向に伸びた巨大な岩体をなして分布し、清見岩体と呼ばれる。カリ長石・石英・斜長石の斑状結晶をともない、花崗斑岩にくらべると黒雲母や角閃石などの苦鉄質鉱物を多く含み、基質は全体に完晶質である。

落部川文象斑岩は、文象組織をともなう細粒の黒雲母文象斑岩からなる。周囲に明瞭に熱変成作用を及ぼしていることから、濃飛流紋岩を広く貫く花崗岩類の一つと考えられる白川花崗類の一部とされているが、岩相から花崗斑岩に含めた。

## (6) 変成岩

### a) 結晶片岩類 (千枚岩を含む) (st)

図幅の北東端にわずかに分布し、南西端のきわめて限られた地域にもわずかに分布する。北東端に分布する岩石は、おもに泥質砂岩や凝灰質砂岩を源岩とする千枚岩からなり、北隣の「飛驒古川」図幅内では片理が顕著な石英片岩となる。古生代ペルム紀に形成された森部層とよばれる地層であり、岩石は脆弱性と剥離性をもつ。

## 3 資料

下記の資料に詳しい。

- 1) 河田清雄(1982) 三日町地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所. 72P.
- 2) 濃飛流紋岩団体研究グループ(1979) 飛驒古川-御母衣湖地域の濃飛流紋岩(概報)-濃飛岩体北部地域における東西地質断面-. 地質学論集, 17, 165-176.



# Ⅲ 土 壤

## 農 地 土 壤

### 1 地域の概要

本地域は、岐阜県の飛騨南部に位置し、清見村、宮村、高山市の西部及び久々野町、荘川村の一部からなっており、北部は国府町、河合村、南部は萩原町に接している。

農地は、主に宮川及び宮川支流の川上川、牧谷川の流域に分布している。

これらの農地のうち、水田の大部分は水稻が栽培されているが、冷涼な気象条件を活かした雨除けハウスを利用したホウレンソウやトマトや牧草等が栽培されている。また、畑地等は主に高冷地野菜や牧草が栽培されている。

農地土壌は7種類の土壌群が分布している。水田土壌は灰色低地土壌が多く、次にグライ土壌、多湿黒ボク土の順となっている。畑地は黄色土壌、黒ボク土壌が主体で、灰色低地土壌等も分布している。

### 2 土壌統群の分布

礫質灰色低地土壌が最も多く分布し、細粒強グライ土壌がこれに次ぎ、細粒灰色低地土壌、厚層多腐植質多湿黒ボク土壌、中粗粒灰色低地土壌が散在し水田に利用されている。細粒黄色土、表層多腐植質黒ボク土壌は畑地に利用されている。

### 3 土壌統群別細説

別紙のとおり

### 3 土壌群別細説

#### (1) 黒ボク土(03,04,05)

土性は壤質～粘質、腐植含有量は富む～頗る富む。母材は火山噴出物からできた土壌で、保肥力は高いが、磷酸や塩基類に乏しい(03)。多湿黒ボク土(04)は台地凹部または沖積低地凹部に分布し、排水不良が加わる。黒ボクグライ土(05)は多湿黒ボク土と同様にほぼ全層がグライ層で、下層にしばしば泥炭や黒泥が混在する。

#### (2) 黄色土(10)

土性は強粘質～壤質、腐植含有量は少ない。土色は黄色味が強く、丘陵地斜面に分布し、強酸性で塩基類に乏しく、保肥力、養分供給力等に欠陥があ

#### (3) 灰色低地土(13)

土性は、強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は、ほぼ全層が灰色又は灰褐色を示す。沖積地帯に分布するが、グライ土に比べて地下水位が低く、排水は良く、腐植含量が少ない。この土壌は保肥力が強くて養分供給能に富み、高い水稻生産力を示し、本県の水田土壌としてはかなり特異的である。

#### (4) グライ土(14)

土性は強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は青灰色で、グライ層が現れる位置で細分化される。沖積地帯に分布し、地下水位は高く、排水は悪い。腐植含有量は概して少ない。

#### 4 市町村別土壤総群面積一覽表

##### (1) 水田の部

市町村名	土壤群名	土壤統群名	土壤群番号	分布面積 (ha)	備 考
高山市	灰色低地土壤	細粒灰色低地土壤	1306	196	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である
		礫質灰色低地土壤	1311	245	
			1322	281	
	グライ土壤	細粒強グライ土壤	1403	166	
			1404	185	
宮村	灰色低地土壤	礫質灰色低地土壤	1312	116	同 上
	グライ土壤	中粗粒強グライ土壤	1406	20	
			1407	4	
清見村	多湿黒ボク土壤	厚層多腐植質多湿黒ボク土壤	0409	74	同 上
	灰色低地土壤	中粗粒灰色低地土壤	1307	60	
			礫質灰色低地土壤	1311	
		1312		85	
		中粗粒灰色低地土壤		1318	
		礫質灰色低地土壤	1321	35	
	グライ土壤	細粒強グライ土壤	1403	13	同 上
		中粗粒強グライ土壤	1405	16	
		礫質強グライ土壤	1413	19	
莊川村	多湿黒ボク土壤	表層腐植質多湿黒ボク土壤	0437	33	同 上
	灰色低地土壤	礫質灰色低地土壤	1321	10	
			1322	20	
久々野町	灰色低地土壤	礫質灰色低地土壤	1312	129	同 上
	グライ土壤	中粗粒強グライ土壤	1406	9	

## (1) 畑地の部

市町村名	土壌群名	土 壌 統 群 名	土壌群 番 号	分布面積 (ha)	備 考
高 山 市	黒ボク土壌	表層多腐植質黒ボク土壌	0313	38	当図幅におけ る分布面積は左 記の分布面積の 一部である
		表層腐植質黒ボク土壌	0337	32	
	黄色土壌	細粒黄色土壌	1002	78	
		礫質黄色土壌	1010	14	
	灰色低地土壌	灰色低地土壌	1337	29	
宮 村	黒ボク土壌	表層多腐植質黒ボク土壌	0313	14	同 上
		表層腐植質黒ボク土壌	0326	6	
	灰色低地土壌	灰色低地土壌	1336	3	
清 見 村	黒ボク土壌	表層多腐植質黒ボク土壌	0313	12	同 上
		表層腐植質黒ボク土壌	0337	3	
	黄色土壌	細粒黄色土壌	1004	10	
		礫質黄色土壌	1013	3	
	褐色低地土壌	礫質褐色低地土壌	1206	8	
荘 川 村	岩屑土壌		0101	25	同 上
	黄色土壌	細粒黄色土壌	1002	20	

## 5 資料

- (1) 岐阜県農業試験場（1971～76） 水田及び畑地土壌生産分級図  
岐阜県高山地域  
岐阜県大野東部地域  
岐阜県大野西部地域
- (2) 岐阜県農業試験場（1979） 地力保全基本調査総合成績書
- (3) 農業技術研究所化学部土壌第3科（1983） 農耕地土壌の分類—土壌  
統の設定基準及び土壌統表（第2次案改訂版）
- (4) 土壌保全調査事業全国協議会（1986） 土壌断面をどう見るか
- (5) 福富敏雄（1991） 岐阜県の耕地土壌の実態と改善対策
- (6) 農業センサス（1995） 岐阜県
- (7) 岐阜農林水産統計年報 1999年～2000年  
（東海農政局岐阜統計事務所）  
（岐阜農林統計協会）

## 林 地 土 壤

この図幅の範囲『三日町』地域は、岐阜県飛騨地方の中央部に位置し、図幅北東側の高山市内（約550m）から南側の川上岳（1,626m）まで、およそ1,100mの標高差がある。図幅南東部には川上岳のほか、位山（1,529m）、船山（1,480m）の位山三山があり、1,400～1,600mの峰々が続いている。これらの山域の山頂付近には、ササ風衝地が広がっている。また約1,500m以下には山地帯の落葉広葉樹林が分布する。

この地域には、ほぼ全域にわたって火山性岩石の濃飛流紋岩類とそれを貫く深成岩の花崗斑岩が分布する。その他の地質は極めて限られるが、図幅南西端に花崗岩類、手取層群の堆積岩類が分布し、烏帽子岳火山岩類が濃飛流紋岩を覆っている。

土壌の分布を概説する。亜高山帯下部から山地帯の境界域にかけては、湿性ポドゾル化土壌が分布している。山地帯の痩せた尾根には乾性ポドゾル化土壌、その他の地域には、褐色森林土壌が広く分布している。大きな河川沿いの段丘堆積物の分布する地域や山麓の緩斜面には、黒ボク土壌が多くみられる。

本図幅に出現する土壌は地形、地質と密接な関係を示し、6土壌群9土壌統群に分類された（表-1）。

### 1. 未熟土

未熟土は、崩壊などにより表土が流出したような受蝕性の強い土壌、あるいは河川の氾濫原などで新しく土壌が堆積し、土壌化が進んでいない箇所を示した。分布面積は狭い。

### 2. 黒ボク土

黒ボク土は火山灰を母材とする土壌で、図幅中では小鳥川、川上川、馬瀬川、宮川沿いに特に広くみられる。Bl<sub>b</sub>型土壌である場合が多く、A層は黒色で腐植に富み土層は厚く、時に1m以上になる場合がある。

傾斜の緩い谷部や段丘上あるいは山麓緩斜面から斜面のかなり上部まで広範に分布する。母材の移動がほとんどない山頂平坦面や非常に緩い斜面上でよく発達し、逆に水流がある斜面ではみられないことが多い。石礫は、土砂の移動が少ない場所ではほとんど含まれていないが、二次的に堆積した黒ボク土の場合は多量に含まれることが多い。

また場所によっては黒色土層の表層が褪色し、褐色森林土に近い色相を示したり、表層は褐色森林土であるが、深くなるにつれて黒ボク土の様相を示す土壤もみられる。

植生はスギの造林地となっている場合が多く、ミズナラ、コナラ、ホオノキ、シラカンバなどの天然生林がみられる場合がある。特に湿った黒ボク土の地域では、ヒノキのとっくり病が発生する場合があります、注意が必要である。

### 3. 褐色森林土

褐色森林土は、山地帯の土壤の主体をなすもので、分布面積は広い。水湿状態によって3土壌統群を区分した。このうち乾性褐色森林土は尾根稜線部や斜面上部に、褐色森林土は尾根鞍部から山腹斜面、谷にかけて広く分布する。湿性褐色森林土は崩積土が谷に堆積した箇所分布する。

#### (1) 乾性褐色森林土

乾性褐色森林土は、褐色森林土のうちB<sub>A</sub>、B<sub>B</sub>、B<sub>C</sub>型土壤に相当するもので、尾根や斜面上部に分布する。図幅中には山田1統、船山1統、古道1統、日和田1統の4統が分布する。尾根稜線部の乾燥した場所に出現するのは、土壤生産力が特に低い。

植生は、上層木にはアカマツ、ヒメコマツ、ミズナラ、コナラ、クリ、リョウブなど、下層にはウリカエデ、ネジキ、ホツツジ、ヤマツツジ、ヤマウルシなどがみられる。

##### ①山田1統

花崗岩、文象斑岩、花崗斑岩、花崗閃緑斑岩など花崗岩類を母材とし、図幅の南西部から北西部にかけての尾根、斜面上部に帯状に分布する乾性土

である。このうち花崗閃緑斑岩を母材とする土壤は、母材の性質からその他の花崗岩類と濃飛流紋岩類を母材とする土壤との中間の性質を有すると考えられる。A<sub>0</sub>層は比較的良好に発達する。土性は、未熟性の強いものでは砂壤土、比較的土壤化の進んだものでは壤土であることが多い。全土層深は薄い。

#### ②船山1統

濃飛流紋岩類を母材として、図幅中全域の尾根稜線部や斜面上部に分布する乾性土壤である。B<sub>0</sub>型土壤が多い。A<sub>0</sub>層のうちF層が厚く、A層の腐植が多い。また土性はやや埴質で、水湿状態はやや湿っている。

#### ③古道1統

安山岩類を母材として、山地の尾根上に分布する乾性土壤である。図幅の南西側に小面積分布する。

#### ④日和田1統

中生界の堆積岩を母材とし、図幅の西部の尾根に分布する。母材が砂岩の場合には、土性は砂質壤土から壤土で、細粒状構造がよく発達する。また母材が泥岩、頁岩の場合は粒状構造が発達する場合が多い。土壤生産力は低い。

### (2) 褐色森林土壤

褐色森林土壤は、谷沿いから山腹斜面、尾根上部にかけて分布するB<sub>0</sub>(d)、B<sub>0</sub>型土壤に相当するもので、図幅中では最も広範にみられる。山田2統、船山2統、古道2統、日和田2統の4統が分布する。土壤生産力は高い場合が多い。

標高の高い山地では、A<sub>0</sub>層のF、H層がやや厚く、A層に多量の腐植を含むタイプの場合が多い。

植生はスギあるいはヒノキ植林地となることが多い。広葉樹林では、上層木にブナ、ミズナラ、コナラ、アカシデ、サクラ類など、下層にはササ、ノリウツギ、クロモジなどが見られる。



### ①山田2統

花崗岩、文象斑岩、花崗斑岩、花崗閃緑斑岩など花崗岩類を母材とし、図幅の南西部から北西部にかけて山地の斜面中部から下部、谷部に分布する適潤性の土壤である。このうち花崗閃緑斑岩を母材とする土壤は、母材の性質からその他の花崗岩類と濃飛流紋岩類を母材とする土壤との中間の性質を有すると考えられる。標高の高い地域では、A<sub>o</sub>層がやや厚いことが多く、A層は団粒状構造がよく発達する。土性は壤土からやや砂質傾向にある。

### ②船山2統

濃飛流紋岩類を母材として、斜面中部から下部に広く分布する適潤性の土壤である。土性は埴質が強く、土壤の水質状態は比較的良好である。土層中に石礫を多く含む場合が多い。土地生産力は他の統より高い。

### ③古道2統

安山岩類を母材として、山地斜面に分布する適潤性の土壤である。図幅の南西側に分布する。B<sub>o</sub>(d)型土壤が主であり、A<sub>o</sub>層がやや発達する。A層は明褐色で、B層は母材の影響から暗赤色が強い箇所もみられる。

### ④日和田2統

中生界の堆積岩を母材とし、図幅西部の山地斜面に分布する。A層の土性は壤土となることが多い。またA層は腐植に富み黒色が強く、団粒構造がよく発達する。石礫は下層で多い。

## (3) 湿性褐色森林土壤

湿性の褐色森林土壤で、B<sub>E</sub>、B<sub>F</sub>型土壤に相当する。B<sub>E</sub>型土壤はA層に発達した団粒状構造をもつ。スギ、カラマツの生産力が非常に高い。一方B<sub>F</sub>型土壤は、B層が壁状構造になり過湿傾向が強い。生産力は樹種によって大きく異なるが、B<sub>E</sub>型土壤に比べ生産力が低い場合が多い。石礫の含有量は全体的に多く、特に下部の層では極めて多い。

この土壤型の地域はスギの植林地になることが多い。天然生林下では上層

木にサワグルミ、カツラ、ハルニレ、ヤナギ類など、下層にはノリウツギ、フキ、ツリフネソウ、ヒキオコシ、クサソテツ、オシダなどが見られる。

#### 4. 赤黄色土

図幅中では赤色土壌が分布する。

##### (1) 赤色土壌

古期の温暖期に生成された古土壌で、母材の多くは第三紀末から第四紀更新世にかけての堆積物である。A層の層厚は極めて薄く、非常に赤味の強いB層およびC層をもつ。丘陵地頂部などの緩傾斜地にみられ、図幅中では高山市近郊および位山周辺などにみられる。分布が局所的であるため、場所を特定できた箇所のみを図示した。

#### 5. ポドゾル

ポドゾルは寒冷地域に出現する土壌で、A<sub>0</sub>層が発達し、腐植から発生した有機酸により土壌表層で溶脱、集積が認められるものである。図幅内では亜高山帯域から山地帯上部にみられる。乾湿の状態から乾性ポドゾル化土壌、湿性ポドゾル化土壌に区分される。また湿性ポドゾル化土壌は、さらに溶脱および集積の形態から鉄型と腐植型に細分されるが、本図幅では湿性ポドゾル化土壌として一括して扱った。

##### (1) 乾性ポドゾル化土壌

乾性ポドゾル化土壌は、ポドゾル化の程度によりP<sub>D</sub>I、P<sub>D</sub>II、P<sub>D</sub>III型土壌に区分される。山地の尖鋭な尾根など、特に強い乾燥の影響をうける場所に点状または細い線状に分布する。A<sub>0</sub>層のうち特にF層が発達するが、全土層厚は薄い。植生はアカマツ、ネズコ、ヒメコマツ、モミ類などの針葉樹が優占する場合が多い。本図幅中の分布は局所的で面積は広くない。

##### (2) 湿性ポドゾル化土壌

P<sub>w</sub>(i)I、P<sub>w</sub>(i)II、P<sub>w</sub>(i)III型土壌、P<sub>w</sub>(h)I、P<sub>w</sub>(h)II、P<sub>w</sub>(h)III型土壌に

相当し、本図幅中では鉄型の分布が多い。A<sub>0</sub>層のうちH層が発達し、腐植に富むA層、場合によってはH-A層をもつ。寒冷地の平坦地あるいは緩い傾斜地の重粘、ち密な母材の地域に形成され、土質自体もち密である。土壌生産力は低い場合が多い。

この土壌型は、位山三山周辺、火山、傘山、滝ヶ洞山、漆洞山、莊川と清見村境の峰々など、標高1,200m以上の地域で、コウヤマキ、ネズコ、ヒノキなどの針葉樹天然林下、ササ風衝地下に分布する。このうち針葉樹天然林下に分布するタイプは、鮮明な溶脱層がみられるなど、湿性ポドゾル化土壌の特徴を示すものが多い。一方、山頂付近のササ風衝地に分布するものは、A<sub>0</sub>層のうちF層、H層の発達が悪く、土質がち密ではないなど、典型的な湿性ポドゾル化土壌と異なる特徴を示す場合が多い。

## 6. 泥炭土

標高の高い地域の沼沢地など常に滞水するところでは、植物遺体の分解が進まないため、これらが堆積して泥炭層が形成される。また泥炭の分解がかなり進んで、植物組織が肉眼で認められなくなったものを黒泥、黒泥からなる層が黒泥層である。このうち泥炭層が特に厚く発達した土壌が泥炭土、黒泥層をもつ土壌が黒泥土である。

泥炭土は、宮村の刈安湿原周辺でみられる。また標高の高い地域の谷沿いにできた湿地には、黒泥層が堆積する場合がある。松ノ木峠、小鳥峠周辺の湿地などにみられることがあるが、分布範囲が狭いため、図中には記載しなかった。

### (1) 泥炭土

土層上部に泥炭層が厚く堆積した土壌である。図幅中では刈安峠の湿原周辺に分布する。湿原の中にはモウセンゴケ、ニッコウキスゲ、ミズゴケ類、やや陸化した場所にはレンゲツツジやイヌツゲ、タニウツギなどがみられる。

### 参考文献

- (1) 土じょう部 (1976) 森林土壌の分類 (1975). 林業試験場研究報告280:1-

28.

- (2) 日本の地質『中部地方Ⅰ』編集委員会(1988)日本の地質5, 中部地方Ⅱ. 310pp, 共立出版株式会社, 東京.
- (3) 山家富美子・丸山明雄・大貫靖浩・八木久義(1990)岐阜県高山市周辺の赤味の強い2土壌について. 日本林学会大会発表論文集101: 261-262.

表一1 土壌統一覧表

土 壌 群	土 壌 統 群	土 壌 統	母 材	地 形
未熟土	未熟土壌	—	—	—
黒ボク土	黒ボク土壌	—	—	山麓緩斜面・段丘
褐色 森林土	乾性 褐色森林土壌	山田1統 船山1統 古道1統 日和田1統	花崗岩類 濃飛流紋岩類 安山岩類 中生界堆積岩	山地尾根・斜面上部 山地尾根・斜面上部 山地尾根 山地尾根
	褐色森林土壌	山田2統 船山2統 古道2統 日和田2統	花崗岩類 濃飛流紋岩類 安山岩類 中生界堆積岩	山地斜面 山地斜面 山地斜面 山地斜面
	湿性褐色 森林土壌	—	—	谷部
赤黄色土	赤色土壌	—	新生界堆積物	丸い尾根
ポドゾル	乾性ポドゾル 化土壌	—	—	山地の瘦せ尾根
	湿性ポドゾル 化土壌	—	—	山地の緩い尾根・緩 斜面
泥炭土	泥炭土	—	—	湿地・湿原

## IV 土地利用現況

### 1 農地

本図幅の中央から右上部にかけて川上川、図幅左部には小鳥川、図幅左部中央には宮川がそれぞれ北方向に流下しており、それに合流する溪流も多い。

本地域では川上川沿い及び宮川沿いの一部にまとまった農地があるが、地形的な制約もあり、ほとんどの農地が河川に沿って分布している。

この地域の農地では、ほうれん草の生産が盛んである。また、畜産業も熱心に取り組み、特に肉用牛の繁殖、肥育及びハム等の加工業が盛んである。

### 2 林地

本図幅内の全ての市町村において、林地の占める面積率は県平均林野率の81.8%を超えている。高山市では71.4%となっているが、残りの町村では84.0%～95.5%と非常に高い割合である。

所有形態別にながめると、地域内の7市町村では民有林の比率が67.8%となり、県平均の79.1%より若干低い。荘川村では国有林の比率が51.4%と高い割合を占めている。

林地の29%は人工林で構成されている。主要樹種はスギ、ヒノキ、カラマツなどである。天然林のほとんどは広葉樹で占められ、こうした豊かな森林資源を背景に木工、家具製造業が主要な地場産業として発達してきた。

本図幅内では、近年において県内に多く認められるゴルフ場やスキー場などの開発が比較的少なく、林業目的以外に目立った土地利用は見られない。

### 3 市街地・集落等

本図幅の北部を小鳥川、川上川に沿って、国道158号が並行して走り、図幅中央部には清見村を二分するように川上川が流下している。また、本図幅の右部中央には宮川、下部に無数河川が流下している。

集落の大半は、これら国道や河川に沿って点在しており、このうち図幅右上部に比較的大きな市街地が形成されている。

2004年3月

印刷発行

岐阜県土地分類基本調査

〔三日町〕

発行 岐阜県地域計画局土地対策室

〒500-8570 岐阜市藪田南2-1-1

電話 (058) 272-1111

印刷 日新印刷株式会社

岐阜市蔵前2丁目3番1号